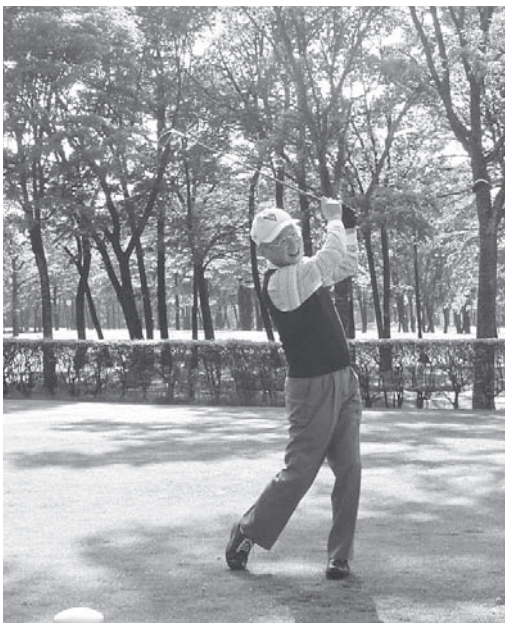
第1回 役員訪問 聞かせてください

聞き手／常任理事　藤井美穂

・生年月日　昭和11年８月７日
・出身大学　北海道大学医学部昭和36年卒
　　耳鼻咽喉科
・好きな言葉　『今日亦無事』
　　（きょうまたこともなく）

●3番センター飯塚君

藤井：にわかインタビュアーですが、よろしくお願いします。ご趣味から伺います。
飯塚：読書ですね。中学校の頃、家にあった世界と日本の文学全集を読破しました。学生時代、特に太宰治にはハマリました。スポーツは野球と陸上短距離。センターをやっていてバックホームの時「捕手が捕りやすいようにスナップを利かせてワンバウンドで投げろ」と指導されるのですが、僕の球はワンバウンドした球がホップしちゃう･･･（笑い）。
　ゴルフもします。ただそれなりに上達して、生意気にもこんなものかとあまり熱が入らなくなった。



●同級生は北大と札幌医大に140人

藤井：医師になったきっかけは？
飯塚：実は教師志望で東京教育大（現筑波大学）に行きたかったんですが親父が倒れてダメになった。北大に医学進学課程が出来た年でそっちに行った。現システムの1期生というわけです。定数は80人。札幌医大にまだ医進課程がなくて北大に60人が来ていた。ですから同期生が140人いる訳ですよ。
藤井：大学時代はいかがでしたか。
飯塚：昭和40年頃、病院に短期出張医で行かされた。当時月10万円、でも半分がピンハネされた。その他に医局費もというのでそっちは払わなかった。教授がたまに皆をススキノに連れて行く、反発して私は行かなかったんだけど、何かの事情で1回だけ付いて行った。これは今でも後悔してますね。
　医局では昼ご飯を教授以下全員揃って食べる。下っ端の私は味噌汁の注ぎ役。ある時、教授がいつまで待っても来ない。で、以来こんなことは止めて自由にご飯を食べることにした。
　でも、そういう機会にいろいろ面白い話も聞けたので淋しい面もありましたね。

●行政とケンカ（真剣な取組み）

藤井：医師会活動のきっかけは？
飯塚：開業したことと関連するのですが、

北海道医師会　会長　　飯 塚 弘 志

大学紛争で教授たちが総括される姿を見て幻滅し価値観が変わり、大学を出た。国立札幌病院で1年勤務して開業。開業したら処置、手術、全部自分でやらなくてはならない。2階にベッドを4つ置いて患者をかついで上がった。寝室に連絡用のインターホンを付けてね。一生懸命診療するんだけどさっぱりむくわれない。開業翌年の昭和46年、保険医総辞退が医師会の指令であり私も参加した。それなりに不満も言った。それなら自分でやれと言われて札医の理事になった。昭和49年、37歳でしたね。

藤井：その後は？

飯塚：当時、世の中の仕組みもおかしいと感じて北大の経済学の若手に家庭教師を頼んで勉強していた。当時、武見日医会長が「医療システム研究委員会」に全国から若手を集めたいとの話が持ち上がり白羽の矢が立ち、昭和59年に参画した。

藤井：今年で22年目、印象的なことは？

飯塚：「医療計画」が策定されることになって、“機能”に着目すべきであると当時の山﨑会長に進言すると多額の調査費用をポンと出してくれた。

　医療と経済、社会の関係を考えたくて北大のシステム工学の教室に通って勉強していたのが大変役に立った。道内の全病院のうち2ヵ所を除き調査に協力してくれた。本当に嬉しかったですね。医療機能、患者の流れのデータを元に行政と丁々発止とやりあった。ケンカが上手と言われたが、とにかく必死でやった。ケンカしてから行政と心が通い合うようになった。

藤井：お好きな言葉を教えてください。

飯塚：『今日亦無事（きょうもまたこともなく）』かな。事なかれ主義ではなくアクティブな意味でね。平和で人の心を安寧する良い言葉と思っています。

インタビューを終えて

飯塚会長は『真面目、真剣勝負』の人

この新企画ではもっとソフトな感じを出したかったのですが、少し固い内容になりました。普段の会議では笑いながらシニカルな冗談を飛ばす会長です、学生結婚をされていたのは初耳でした。奥様に「子育て、教育、家のことはすべて任せていた」とおっしゃる先生に「今、反撃されてますか？」と伺うと、大笑いされてご返事はいただけませんでした。
本記事は、これから毎号、私がインタビュアーを務めさせていただき、役員を順次紹介いたします。どうぞお楽しみに。

常任理事
藤 井 美 穂